

佳作

いつもありがとう

「竹のこほりに行くよ。」

四月の休みの日におじいちゃんと言いました。おじいちゃん
は、わたしと弟をいろんなところへつれていってくれます。
わたしは、わくわくしながら、三人でおじいちゃんのトラックに
のりました。

ついたところは、おじいちゃんの友だちのいえでした。そこに
は、長い竹がいっぱい生えていて、ちゃ色のようふくをきたよう
なものも生えています。おじいちゃんとおじいさんは、せのひくい
ちゃ色の竹のこを切りはじめました。わたしは、せの高い竹のこ
のほうがいっぱい食べられるのにと、おじいちゃんに、
「こつちにも、竹のこあるよ。」
と言うと、

「大きいのはね、かたくて食べられないんだよ。」

とおじいちゃんがやさしく教えてくれました。

「竹のこは、せが高くなって竹になるから、もう、竹の子ど
もじゃなかったんだ。おにいさんくらいかな。」

つて言いながら、わたしと弟はトラックのにだいにきょうそ
うしながら、竹のこをのせました。

おじいちゃんのをいえにかえると、

「いっぱい、とってきたね。」

おばあちゃんがなべをもつてにわにでてきました。

「ほら、こやうやってかわをむくのよ。」

鹿児島県

薩摩川内市立可愛小学校二年

福浦帆乃夏

と、竹のこの上に切りこみを入れて、下のほうにサーッとむ
いて見せてくれました。わたしも同じようにやろうと思っ
たのに、かたくてなかなかじょうずにできません。かわは、
ざらざらしていて、竹と同じにおいがしました。少しづつ、
むいていくと、はだ色の竹のこが見えてきました。楽しく
て、私は、五本。弟は、二本むきました。

おばあちゃんが、なべの中に水と竹のこを入れて、ゆでました。

「さめてから、もつてかえりなさい。」

と、おばあちゃんと言いました。わたしは、早く自分でむい
た竹のこが食べたくて、まだかなあとなべをのぞきました。

「あれっほかのやさしいは。」

「まだよ。竹のこは、一回ゆでてから、りょうりするのよ。」

と、おばあちゃんがやっぱりやさしく教えてくれました。

いえにかえてから、お母さんがやさしいと、とりくと、
竹のこで、りょうりしてくれました。まちにまった、わたし
の竹のこは、口の中でシャキ、シャキい音をならして、

「やつとあえたね。ほのかちゃん。」つて言ってるような気
がします。

わたしとつて竹のこは、やさしいおじいちゃんおばあちゃん
のあじになりました。おじいちゃんおばあちゃん、わたしを
竹のこにあわせてくれてありがとう。二人のおかげで、わたし
は、いつもいろんな楽しいことに出あえます。ありがとう。